浅い眠り

初瀬川幸次郎

【登場人物】

久屋栄（ヒサヤサカエ）［２５］：双子の妹
久屋瑞穂（ヒサヤミズホ）［２５］：双子の姉
志賀（シガ）［４５］：副村長
砂田大幸（スナダヒロユキ）［３８］：元死刑囚
伝馬（テンマ）［３５］：記者
茶屋（チャヤ）［３２］：副村長の愛人
亀島（カメジマ）［３０］：村民
田中（タナカ）［６５］：村長

地方の村落共同体。そこでは１００人程度の人間が共同生活を営んでいる。
その村の中心にある建物の書庫と呼ばれる場所。

９月２３日（日）。１５時。
上手には廊下に通じるドアが、奥には水場に通じるドアが付いている。
そこに栄と志賀、茶屋が座って話をしている。
少し離れた所から亀島の歌声がうっすらと聞こえる。

栄　個性を持って人は生きるべきみたいなものが当たり前になってて。もちろんそういう人がいてもいいですしそうあるべき人もいるとは思うんですけど、そうじゃない人もいると思うんです。わたしなんかが特にそうで。突出した個性が無ければ生きている価値が無いみたいな。でも突出したものがないという個性もあるというか、まあ結局個性って言っちゃってますけど。そういう人のいる場所がどんどん。それでこの村をひとつの生命体、みたいに例えている所に共感というか。

茶屋　ああ、あの雑誌のインタビュー。

志賀　この村ではそれぞれに与えられた役割をこなしながら、ただ静かに日々を過ごしていく。わたしはこの共同体をひとつの生命体として捉えてますので、我々はそれを構成する細胞の集合体という位置付け。そこに特別なものは何もなく

て、人としての機能だけがあればいい。

栄　そうそうそうそれです。

茶屋　村長のインタビュー内容ほとんど覚えてるよね。

志賀　まさにその通りで、個性の無い個性が生きていく場所が今どこにもなく。だから村長はこの村を作ったんです。突き詰めていけば地球だって人間だって原子の集合体なんですから。人間だけが特別じゃない。

栄　そうですよね。ここがわたしのいる生きていける場所かもしれないって。

茶屋　また村長の受け売り。まあここに移住希望の方は大体そんな感じですけどね。

栄　そうですよね。

志賀　まあでも村長、って呼ばれると困った顔されますけどねあの人。特別扱い苦手だから。

茶屋　かと言ってリーダーとか言うと更に困った顔しますし。田中さんって呼ぶのもなんか違うってことで結局村長って呼ばれてますけど。

志賀　苗字がコンプレックスだったことがきっかけで、村長。

栄　よくある苗字ですもんね。

志賀　なんでこの村では我々はそんな感じです。

茶屋　ああでも、アーミッシュ的なのと勘違いして来られる方もいるけど。それ違うから。

栄　アーミッシュ。

志賀　現代技術を拒否して生活をしている団体。昔ながらの。共通点はそれなりにありますけどね。外部との連絡は禁止ですので、携帯は入村時に破棄して貰います。車もインターネットもありませんから。知ってるとは思いますけど。

茶屋　どっちかというとアナーキズムに近いかも。

栄　アナーキズムですか。

志賀　中でも特に無政府共産主義が一番近いかと。でもいくつか独自ルールがあって。まず、他人の詮索はしない。

栄　詮索。

志賀　こう言っちゃなんですが、訳有りの方がここには結構来られます。こんな場所ですし。でも叩いて埃の出ない人なんかいませんから。だからお互い必要以上

茶屋　の詮索はしない。住民として機能していれば問題は。それが村長の方針。

志賀　わたし別に隠すこと無いけどね。昔、春売ってたし。

茶屋　こうやって自分からペラペラ喋るのも本当はよろしくない。

志賀　悪い例として。

あと特に時間を守らない人とかは

ドアが開いて砂田が入ってくる。

首には包帯を巻いている。

砂田　ああ。居た。

特に悪びれる様子もない砂田。

呆気に取られる一同。

砂田　あれ。面接ってここですよね。

志賀　ああ砂田さん。

砂田　そうです。

志賀　ここまで歩いてきたんですか。よく来れましたね。

砂田　出迎えが来ないから。

志賀　行きましたよ。久屋さんいましたし、ねえ。

栄　はあ。というかバス乗ってましたよね。

砂田　ああいたね。

栄　バス停で待ち合わせだった筈だけど。あれからどこ行かれたんですか。

砂田　蝶々飛んでて。

栄　追っかけてったんですか。

茶屋　子供か。

砂田　少しくらい待とうよ。

志賀　待ちましたよ３０分も。

茶屋　というか謝らないんですか。

砂田　入る時に頭下げたじゃないですか。

茶屋　それって、

砂田　ここ来るまで5時間歩いたんだけど。

茶屋　遅刻するからでしょ。

砂田　遅刻はしてない。

志賀　にしてもよく辿り着きましたね。普通バス停からここまで来れませんよ。

茶屋　本当ね。奇跡。

砂田　知らないよそんなの。

志賀　まあ、とにかくここの案内も終わりましたし、面接途中からの参加になりますが。

砂田　そっちがそれでいいなら。

茶屋　なにそれ。

志賀　じゃあこちら。

砂田　どうも。

椅子を用意する茶屋。

志賀　久屋さん大丈夫ですか。

栄　わたしは。うん。

書類に目を通す志賀。

志賀　ええと、スナダヒロユキさん。

砂田　はい。

志賀　まあ時間無いし大体書いて貰ってますんで肝心な部分だけ。

砂田　どうぞ。

志賀　じゃあ改めてあなたがここに移住希望した動機を教えてください。

砂田　それも書いた気がするんですけど、ここなら静かに生きていけそうなんで。

茶屋　一応言っときますけど、ここだって生活共同体なんだから社交性は必要ですよ。

砂田　そりゃそうでしょうね。与えられた仕事はこなしますから。そういうの得意だし。
茶屋　遅刻はご法度ですけど。
砂田　遅刻はしてない。
茶屋　今後は問題無いと。
砂田　時間には厳しい方なんで。
茶屋　へえ。
志賀　久屋さんもそうですけど、どういう仕事をして貰うかはこちらで決めさせて頂きますから。
砂田　ほう。というかこれって決定ということで。
茶屋　まだに決まってるでしょ。
志賀　それとご飯は配給制。アレルギーがあるって。
砂田　まあ。
志賀　その辺は言ってくれれば対応しますんで大丈夫です。美味しいですようちは。
茶屋　低農薬栽培だし。うちの貴重な収入源のひとつ。
砂田　知ってます。
茶屋　ああそう。
志賀　そうそう。他にも身体に優しい服とかアクセサリ作ったり。
茶屋　いまわたしたちが着てるのも。亀島さんっていう子いるんだけど、すっごく上手で。
栄　いいですね。わたし肌弱いからちょうどいいかも。
茶屋　これも売ったりしてるよ。
栄　へえ。
砂田　それで村の経営成り立つんだ。
志賀　まあなんとか。
茶屋　なんかあっちから歌聞こえるでしょ。
栄　ああちょっと気になってました。
茶屋　その子が。ちょっと風変わりな子で。自然体というか空っぽつうか。
栄　ちょっと会ってみたい。

志賀　すいません話戻して、物の購入に関してもその都度確認します。変な物持ち込まれても困るので。本かＤＶＤ辺りですけど皆さん。読み終わった本とかここで共有してるんです。

砂田　知ってます。

茶屋　なんでも知ってるのね。元々ただの物置だったのここ。知ってる。

砂田　（無視）

志賀　おう。提出書類向こうに忘れて。ついでにトイレ休憩にしましょか。茶屋さんちょっと。

茶屋　ああはい。

部屋を出て行く志賀と茶屋。

どこか遠い所を見つめている砂田。

居心地が悪い栄。

栄　あの。

砂田　あ、うん。

栄　首、それ。

砂田　別に。

栄　大丈夫ですか。

砂田　それ聞いてどうするんですか。

栄　いや。

砂田　それが分かるとどうなるんですか。気持ちいいんですか。

栄　そういうあれじゃ。

砂田　あれってなんですか。ならこっちはその手首の傷について聞けばいいですかね。

思わず手首を押さえる栄。

栄　いやすいません。

砂田　別に謝らなくていいけど。なんかそういうのってよう分からん。

栄　　そういうの。

砂田　謝るとかそういうの。意味が分からん。

栄　　そう。

砂田　なんかどうも色々欠落してるらしいから気にしなくていいよ。

栄　　でも、二人とも受かるといいですね。

砂田　無理でしょ。

栄　　一人だと不安ですし、砂田さん、も一緒に入れるよう言って。

砂田　あなたがそうしたいなら好きにすればいいけど。

栄　　んー。

砂田　というか自分はもう受かったような言い方するね。

栄　　前向きだけが取り柄なんで。

砂田　前向きな奴はここ来ないよ。

栄　　あはは。今のうちちょっとトイレ行ってきます。

トイレに立つ栄。

入れ違いに志賀と茶屋が戻ってくる。

志賀　とりあえず顔合せは出来ましたので、久屋さん戻ったら一旦終わりましょうか。

砂田　もう。

志賀　基本面接に行った人はほぼ合格なんです、実は。遅刻は想定外ですけど。

砂田　遅刻はしてない。

志賀　そうだ。大体のこと読んでおられると思いますけど、入村時に財産は全部こちらに入れて頂きますよ。

砂田　知ってます。

志賀　書類だと2000万。

砂田　いらない金なんで。

茶屋　後でやっぱ返せってのは出来ませんよ。

砂田　いらない金だって。

志賀　医師免許もあるそうで。ちょうど医者居なくて。

茶屋　意外。

砂田　今やってないけど。

栄が戻ってくる。

栄　すいません。

志賀　いえいえ。最低限聞きたいこと聞けましたので今日は終わりに。

栄　砂田さん来たばっかなのに。

茶屋　次のバスで今日最後だから。日曜しかバス動いてないんで、これ逃すと1週間来ませんから。

栄　ええ。じゃあ急がないと。

茶屋　あとこれ書いといて。

栄と砂田に書類を渡す茶屋。

志賀　バス停まで車でお送り。ちょっと玄関で待っててください。すぐ行きますんで。

部屋を出る栄と砂田。

茶屋　結局あの人も合格なんだ。面倒くさ。というか二人とも闇が深そう。

志賀　基本来る人拒まずが村長のスタンスだし。

茶屋　村長の。

志賀　そう。

茶屋　もう少し自分の考え出せばいいのに。実質運営してるの志賀さんなんだから。

志賀　そういうこと言わない。わたしは村長の理想を実現する為に生きてるんだから。

茶屋　でも実際貯金無かったらどうだったんだろ。お金の欄しか見てなかったからわたし。

志賀　他も見なさいよ。

茶屋　うん。にしても最近ちょっと希望者が。先週も一人入ったし。でも包帯の人も

志賀　そうだけどあの女の人も例の。実際会ってちょっとびっくりした。

茶屋　とにかく少しでも人手を増やしていかないと。

最近ちょっと無理してない。まだ村長見つからないの。もうすぐ15周年でしょ村の。

志賀　まだ。

茶屋　そっか。じゃあ今夜一緒にお酒飲もうよ。

志賀　うん。

茶屋　倉庫から持ってくから。

志賀　いや、やっぱいい。

茶屋　え、なんで。

志賀　なんかそういう気分でも。

茶屋　ふうん、そう。じゃあまた近く町行こうよ。

志賀　あれは買い出しで行ってるだけで。勘違いしちゃ。

茶屋　分かってるけど、リフレッシュしなきゃ。

志賀　君が行きたいだけでしょ。

茶屋　そうですよ。今度は二人で。

志賀　その間ここはどうするの。村長だって、

茶屋　少しくらい。

志賀　その『少しくらい』が堕落の最初の一歩に。

茶屋　大丈夫。子供じゃないんだから。

志賀　駄目。

茶屋　志賀さあん。

机を叩く志賀。

志賀　今はそんなこと言ってる時じゃないから。

茶屋　すいません。

先に退室する志賀。

しばらくしてその後を追って退室する茶屋。

１０月４日（木）。１２時。
書庫で栄が天井を見ながらぼーっと座っていると伝馬が現れる。
しばらくはそれぞれに本を見たりしているが、伝馬がおもむろに栄に話し掛ける。

伝馬　あの、最近入った人ってあなた。
栄　はい。あともう一人いますけど。
伝馬　あの首に包帯の人、ですよね。
栄　そうですそうです。
伝馬　そう、ちょうど今その人探してて。知ってます。
栄　いやちょっと分からないです。
伝馬　ああそう。あの、久屋さんですよね。
栄　はい。伝馬、さん。
伝馬　はいはい。新入り同士仲良くしてください。
栄　こちらこそお願いします。

社交辞令のお辞儀がしばらく続く。
少し楽な姿勢になる二人。

伝馬　天井、何かあります。
栄　何って。
伝馬　なんか天井見てたから。
栄　絵を描いてたんです。
伝馬　絵。
栄　染みとか汚れとか繋げていくと絵になるんですよ。見る度に変わるから不思議。
伝馬　俺はあなたの方が不思議ですが。
栄　美大出身なんで。

伝馬　そうなんだ。で、正直ここの暮らしどう。
栄　んー。そちらは。最近入られたんですよね。
伝馬　そうそう。そうね、身体中が痛い。
栄　皆さんそう言いますね。畑仕事。
伝馬　分かっちゃいたけど。もういいから農薬じゃんじゃん使えよって思った。
栄　ぶっちゃけますね。
伝馬　んで、そっちはどう。
栄　正直、ですか。
伝馬　正直。
栄　思った以上に窮屈。
伝馬　ああ分かる分かる。
栄　気の良い人は多いんですけど、どこか一線引いてる感じが。ここもたまに人が来るくらい。本借りに。それも同じ人ばっかで。
伝馬　あ、亀島さんですか。あの女性の。
栄　そうそうそう。ミステリーばっか借りてくんですけど、本当に読んでるのか。たまに同じの借りていくし。
伝馬　人間の原点みたいな人。
栄　言ってることはあれですけど言いたいことは。あとはたまに子供が来るくらいかな。絵本とか。可愛い。
伝馬　子供好きなんだ。
栄　本当は自分の子供が欲しいんですけどね。
伝馬　相手探さないと。
栄　ここじゃね。
伝馬　で、村の散策とかしてみましたか。
栄　周りの目が怖くて。未だにどんな人がいるのか分からないここ。
伝馬　分かる。
栄　伝馬さんは。
伝馬　少しね。まあ身体にはいいよねここは。
栄　空気も綺麗だし。ちょっと健康になった気はする。

伝馬　でもご飯はどうにかならんもんかな。

栄　えー。美味しいじゃないですか。

伝馬　本気で言ってる。

栄　はい。

伝馬　これまで不味いものしか食べて来なかったんじゃ。

栄　失敬な。うちこう見えても創業７５年の旅館ですよ。

伝馬　経営大丈夫それ。

栄　大丈夫、ではないです。でも、舌がおかしいのはそっちかも。

伝馬　それは無い。美食と呼ばれるものは大体網羅してるから。

栄　はあ。確かになんかこだわりが凄そう。

伝馬　あ。ああ、ごめん。初対面なのに色々。

栄　別に大丈夫大丈夫です。久し振りに人と喋った。

伝馬　俺も。

栄　なんか他の方ともう少し交流したり出来ないんでしょうか。

伝馬　そういうことをしたがらない集団だからね。一人一部屋くれるのは有難いけど。

栄　確かに。

伝馬　というか久屋さんさ、何か目的あってここに来たんじゃないの。

栄　え、なんでですか。

伝馬　だって正直ここに来る人のほとんどは必要以上の交流とか興味ないから。

栄　中にはそういう人だって。

伝馬　大丈夫ですよ。何かあるなら協力しますよ。

栄　無いです。大丈夫です。

伝馬　そう。

茶屋が入ってくる。

誰かを探している様子。

茶屋　あらこんにちわ。

栄　（会釈）。

伝馬　どうも。
茶屋　どうです。慣れましたここ。
伝馬　んー。まあまあまあ。
栄　ですね。
茶屋　意外とすぐ慣れますよ。年に何度か忙しい時はあるけど、基本同じことの繰り返しなんで。でもなんでわざわざこんな所に。変わり者ですよね二人共。
伝馬　茶屋さんだって。
茶屋　わたしはまあ、ね。ここに来る人は大体なんかあった人だから。
栄　それは分かります。
茶屋　でもあの人、包帯の人。
栄　砂田さん。
茶屋　そうそう。あの人どうなるかと思ったけど一番馴染んでるね。淡々と仕事して速攻帰るだけだし。
伝馬　ここなら優等生ですね。
茶屋　この村の為に生まれたみたいな人だね。
伝馬　でも他の皆さんもそんな感じですよね。あんまり喋らないし。
茶屋　そういう集団だからね。
栄　わたし、もう少し皆で色々イベントとかやるのかと思ってました。
茶屋　なにそれ。
栄　運動会とか、文化祭とか。
伝馬　中学生か。
栄　あとほらなんとか音頭とか。盆踊り。
茶屋　いやいやいや何を期待してるんですか。そもそも村の人が集まることも滅多にないから。あっちに大きめの集会室もあるから勿体無いんだけどね。亀島さんがたまに何人かで音楽会みたいなのやってるみたいだけど。
栄　あの人本当に面白いですよね。
茶屋　正直困るんだけど。もし亀島さんに絡まれてる人いたら教えて。あとついでに言っとくけど、村の探検とかアクティブにしてるそうだけどやめてねそういうの。

伝馬　なんで。
茶屋　ここでは人の詮索しないのが暗黙のルール。特にあなた。
栄　わたしですか。
茶屋　あまり人にあれこれ聞かないように。この書庫の諸々やってくれるだけでいいから。古本屋にいそうな顔してたからここに決まったけど、あまりにあれだと異動させせられるからね。
栄　大丈夫です。頑張ります。
茶屋　いやだから頑張らなくていいから。あ、あと志賀さん見なかった。
栄　いや。
伝馬　自分も。
茶屋　そういえば栄さん、志賀さんとあれから話したの。
栄　いや別に。何かありましたか。
茶屋　ならいいけど。あまり志賀さんに迷惑掛けないでね。じゃ。

書庫から出て行く茶屋。

伝馬　目、つけられてるね。
栄　はあ。いやでも『古本屋にいそうな顔』ですかねわたし。
伝馬　どうでしょうね。
栄　中古女的な意味合いかな。
伝馬　考えすぎだって。
栄　茶屋さんになにか悪いことしたかな。

考え込む栄。

伝馬　いやそこまで気にしなくても。大した意味は無いって。
栄　ああ、じゃなくて。伝馬さんにお願いしたくて。
伝馬　おう。なんでしょう。
栄　何かあれば協力ってさっき。

伝馬　内容によりますが。
栄　ええならやめときます。
伝馬　いやいやいやそこまで言ったなら。ね。
栄　あの。
伝馬　はい。
栄　姉を探してるんです。
伝馬　姉。
栄　瑞穂って言うんですけど久屋瑞穂。でも数年前にいなくなっちゃって。で、色々探していたらここに入ったんじゃないかっていう話を聞いて。瑞穂には戻って貰わないと。わたしみたいのはいいんだけど、瑞穂は。
伝馬　戻って貰わないと何か。
栄　家の事情で。わたしで代われるなら代わりたいけど。あの子みたいになれるんなら。
伝馬　そんなに凄いの。
栄　凄いっていうか何も敵わないし。絵だってあの子が全然上手かった本当は。
伝馬　何かひとつくらい。
栄　無い。なにひとつ。わたしに無いもの全部持ってるから。
伝馬　はあ。でもそこまで大きな村じゃないですよねここ。１００人位って言ってたし。
栄　そうですけどちょっと動くとさっきみたくすぐ。
伝馬　顔似てます？
栄　わたしと同じです。双子なんで。
伝馬　ああ。なら村の人に何か。
栄　ですよね。でもそういう踏み込んだ話は誰もしないから。いい人ばっかかなんだけど。
伝馬　逆に怖いよね。あ、でも志賀さん達は。
栄　そう。もしかして隠してるんじゃないかってむしろ。
伝馬　どうして。
栄　あの子わたしのこと避けてるから。

伝馬　でも、だったらこの村に入れないんじゃないかな。
栄　それはあれですよ。お金ですよきっと。
伝馬　どのくらい納めたんですか。
栄　３００万くらい。
伝馬　わりかし納めましたね。
栄　昔バイトしてた時の貯金が。家の手伝いだけど。
伝馬　それにしちゃ結構貯めましたね。
栄　使い道無かったし。
伝馬　というか本当に全部納めちゃったの。
栄　だって決まりで。
伝馬　ああそう。まあいいやそれで姉を探したい。
栄　手伝ってくれます。
伝馬　いいけどもう少し特徴とか。
栄　まあ見れば分かるとは思いますけど、わたしとは正反対かな性格。きついです。
なんで見つけても直接声掛けない方がいいかも。
伝馬　へえ。
栄　なんでも出来ちゃう人だから、周りの人が苛立って仕方ないのかも。
伝馬　まあなんとなく把握しましたよ。じゃあ代わりにこちらからも。
栄　え。何か。
伝馬　具体的に何ってあれじゃないんだけど、この村に居ておかしなことがあったら
教えて欲しいんですよ。
栄　おかしなって笑い話とか。
伝馬　いやいやそのおかしいじゃなくて。その、一般常識から離れたこととか。
栄　ああ、ああ、ああそっちか。何か具体例が。
伝馬　いやだから具体的に何かってあれじゃないんですけど、例えば行方不明者がい
たとか、変な作物栽培してるとか。
栄　そんなのあるんですかここ。
伝馬　噂が。もしかするとお姉さんもそういう部署にいるかもしれない。
栄　確かに。

伝馬　ああでも迂闊にそういう場所に行かないほうがいいかも。さっき茶屋さんにも釘刺されたでしょ。

栄　んー。

伝馬　いや止めた方がいい。そういうのは俺やるから。あなたは気付いたことがあれば。

栄　というか何者ですか。

伝馬　大体想像付くでしょ。

栄　大体は。

伝馬　とにかく危険なことはやめて。こういう所って宗教チックなね。一定ラインを超えると何するか分からない。この手の場所は大体そうだけど。

栄　それは分かります。

伝馬　だから危険なことは、ね。

栄　分かり、ました。

伝馬　ああ絶対分かってない。本当に。危険だから。何か気付いたらでいいから。

栄　分かりました。

立ち上がり書庫を出る伝馬。

伝馬　気を付けて。また来るんで。

一人残され、しばらく思案した後、書庫を出る栄。

10月19日（金）。20時。

志賀が入室すると、しばらく忙しなく動き回っている。

そこに茶屋が現れる。

茶屋　村長見つかったって。

志賀　いや見つかってないよ。手紙が見つかっただけ。（手紙を取り出す）

茶屋　見せて見せて。

茶屋に手紙を渡す志賀。

茶屋　まずは１１月１１日の創立１５周年を目前にして、このような形で居なくなってしまうことをお詫びしたい。以前から住民には色々な形でお知らせして参りましたが、いよいよポールシフトによる世界の終わりが近づいています。このことを知っているのは世界でも上位のものだけなのです。彼らは生き残る為の準備を着々と進めていますが、９９％の人間はこのままだと死に絶えることになります。事実を知ってしまった者の責務として、わたしは世界を周りこのことを訴えていこうと考えています。君がいればこの村はきっと大丈夫だと信じています。ただしいつ何が起きてもいいように準備だけは怠りなく。行って参ります。田中太郎。なんなのこれ。

志賀　村長。

茶屋　村長って前からこういう所。ここ数年予言とかそんなことばかり言ってたし。

志賀さん信じてないよね。

（首を横に振る志賀）

志賀　どこにあったのこれ。

茶屋　村長室に隠してあった。机の裏。

志賀　どうするの。

茶屋　どうするも村長の言いつけ通り。それより金が。

志賀　ええまさか村長。あの金庫の

茶屋　ほとんど持ってった。

志賀　田中。

茶屋　ただでさえ資金繰りが厳しいのに。

志賀　新入り入れて正解だったかも。

茶屋　おかげで少しは。でも他の問題が。

志賀　今度はなに。

茶屋　久屋さんがお姉さんを探して回ってるらしい。村をウロウロと。

志賀　それは知ってる。その話をしたくて。

ドアがノックされ、瑞穂が入室する。

瑞穂　すいません失礼します。

茶屋　ああちょうど。暗い中ありがと。

志賀　久屋さん。

瑞穂　志賀さん。なんで妹を村に入れたんですか。

志賀　いやそれは、

瑞穂　わたしあの人達が嫌でここに来たのに。あの人がいるならわたし出ていかないといけない。なんで一言くれなかったんですか。本当嫌。ああもう。

茶屋　なんでそんな嫌なの。

瑞穂　言わないといけませんかそれ。

茶屋　無理して言わなくてもいいけど。

瑞穂　旅館の跡を継がせたいんですわたしに。でもわたし嫌なんですあそこでずっと暮らすの。色々な人に頭下げて、年柄年中誰かに振り回されて。そのうちわたしに全部押し付けるつもり。

茶屋　妹さんがやればいいのに。双子でしょ、妹つっても。

瑞穂　わたしだってそう思ってますよ。でも妹は向いてないんですわたし以上に。トロいから皆からも信用されてないし。でもわたしは絶対嫌。ただ静かに暮らせればそれでいいんです。ここはわたしにとって楽園なんです。仕事して部屋に帰って本読んだり絵描いたり、それだけでいいんですわたしは。絵を描いて暮らすのがわたしの夢。ようやく叶ったのに。ただ静かにいたいだけなんです。でもあの人が来ると全部おしまいなんです。全部。

茶屋　んー。

志賀　じゃあ久屋さん。

瑞穂　はい。

志賀　いやその前に久屋さんが二人になっちゃって、なんて呼べばいいでしょう。

茶屋　志賀さん。

志賀　いやだってややこしい。

瑞穂　下の名前でいいでしょ。
茶屋　じゃあ瑞穂さん。妹が栄さんね。志賀さんもそれでいいですよね。
志賀　じゃあじゃあじゃあ瑞穂、さん。それでなんですけど、ひとつ提案が。
瑞穂　なんですか。
志賀　部署を移って貰おうと。
瑞穂　え。何処ですか。
茶屋　志賀さん、それは。
志賀　瑞穂さんもそろそろここも長いし大丈夫でしょう。どっちにしたって人手不足だから。このままじゃ回らないし。
茶屋　まあそうですけど。
瑞穂　何処でもいいですから、あの人達のいない所に。
志賀　この村の秘密の部署です。
瑞穂　秘密。
志賀　秘密は守れますか。
瑞穂　大丈夫です守ります。
茶屋　そんな簡単に言わないで。これを知ったら本当にこの村から出ることは出来ないから。

少し考える素振りをする瑞穂。

瑞穂　大丈夫です。ここでしか生きていけないんです。だから。
茶屋　そう。いいのね。
瑞穂　はい。

志賀を見る茶屋。

志賀　分かりました。じゃあ細かい所はまた後日お話しましょう。あ、茶屋さん、資料室の金庫に書類置いてあるからちょっと持ってきて。
茶屋　ああはい。

書庫を出る茶屋。

瑞穂　志賀さん。

志賀　何。

瑞穂　なんで妹の件。本当に。

志賀　そんな裏事情があるとか。少しでも村にお金入れないといけないし。

瑞穂　言ってくださいよ本当に。『久屋さんが二人になっちゃって』とか白々しい。

志賀　（苦笑い）

瑞穂　二人の時は瑞穂さんって呼ぶ癖に。その癖肝心なことは言わない。

志賀　前に妹さんのこと軽く聞いてたから大丈夫かって。

瑞穂　別に嫌いじゃない。でもあの子はいつもわたしの大事なものを奪っていくんです。子供の頃からずっと。わたしが欲しかったものは全部あの子が。いつもいつも。あの子が来たらまた奪われる。

志賀　奪われる。

瑞穂　ああもう。志賀さんに言っても分からないだろうけど。それに部署の移動だって先に言っといてよ。

志賀　いや怒ってるって聞いたから離してあげようかと。

瑞穂　本当もう。

志賀　でも本当に君達似てるね。性格はだいぶ違うっぽいけど。

瑞穂　志賀さんまで。見た目が同じならふわふわしてる方が大事にされるんですよ結局。志賀さんも栄の方がいいんだ。

志賀　そんなこと。

瑞穂　また奪われる。

志賀　考え過ぎだって。ほらそろそろ。

瑞穂　後でまた。話しておかないといけないこともあるから。

志賀　ああ茶屋さん来るからもう。

入室する茶屋。

茶屋　はい資料。読んどいて。
瑞穂　ありがとうございます。
茶屋　くれぐれも漏らさないように。
瑞穂　はい。じゃあ失礼します。

書庫を出る瑞穂。
椅子に身体を預ける志賀。

茶屋　志賀さん本当に大丈夫。
志賀　どうだろ。ああそうだ茶屋さん。
茶屋　なに。
志賀　もう一人あっちの部署に誘おうと思ってる。
茶屋　え。誰。
志賀　砂田さん。

首に何か巻きつける仕草をする茶屋。

志賀　うん。
茶屋　よりにもよって。絶対駄目でしょ。
志賀　でも最近入った3人の中じゃ一番この村の理想に近い人物だと思ってる。
茶屋　分からんでもないけど無理無理無理無理だって。いやあれはもう。
志賀　もう決めた。
茶屋　いや、だったらせめて亀島さん、とか。あの人も結構長いし。
志賀　あの子は駄目。
茶屋　砂田さんよりはまだ。
志賀　あの子は何も知らずに生きてて欲しいんです。朝起きて、仕事して、夜は趣味の読書をして、また明日に備える。そんな生活を。それに、あの人ちょっと抜けてるし。

茶屋　分かりますけど、志賀さん、亀島さんにちょっと甘過ぎじゃないですか。砂田さんは。

志賀　裏に行くのはある程度覚悟がある人じゃないと。医師免許も持ってるし。

茶屋　あれの担当ですか。

志賀　今の先生がそろそろだから。砂田さんにしか出来ない仕事でしょ。

茶屋　分かりますけど、そもそも本当に彼を村に入れて良かったんですか。

志賀　それが村長の方針だから。

茶屋　志賀さんがそう言うなら。でも大丈夫。ちょっと疲れ過ぎじゃ。また行こうかそっち。

志賀　いや今日は。

茶屋　最近冷たい。

志賀　そうかな。

茶屋　この前志賀さん一人で町行ってたでしょ。

志賀　あれは調べ物があって。

茶屋　そう。もう我儘言わないから。

志賀　うん。

茶屋　見捨てないでよ。

志賀　どういうこと。

茶屋　いや。

志賀　明日も早いから早く寝て。

茶屋　志賀さんも早く。

志賀　うん。

書庫を出る茶屋。

志賀が振り返ると砂田が座っている。
少し離れた所から亀島の歌声がうっすらと聞こえる。
10月13日（土）。20時。

志賀　砂田さんもお酒飲むんですね。
砂田　飲めるものは飲んでおこうと思っただけ。
志賀　自分の部屋で飲めばいいのに。
砂田　片すの面倒だし。というか週に1度しか飲めないとか。
志賀　村長が元々飲まない人なので。土曜の夜はちょっとだけ五月蝿くって。特に亀島さんとか。で、どうですかここ。最初どうなることかと思いましたけど、しっかりやってますね。
砂田　だから言ったでしょ。
志賀　（頷く）
砂田　なんで、あんたここにいるの。
志賀　わたしですか。
砂田　他に誰もいないでしょうよ。
志賀　わたしは村長の理念を。
砂田　あんた村長のなんなの。なんか気持ち悪。
志賀　別になんでもないですよ。
砂田　村長の傀儡なの。なんの為に生きてるの。
志賀　傀儡て。どう捉えて貰ってもいいですけど。でもわたしは以前人生に疲れ果てた時に助けて貰ったから。命の恩人なんですよ。村長がいなかったら自分は今生きてないし。だから残りの人生はこの村の為に使おうと。当時に比べたら多少のことならなんでもない。今ここでこうして美味しい空気があるだけでもありがたい。
砂田　やっぱ気持ち悪い。
志賀　別にどう思われても。そういうの慣れました。
砂田　そんなに拘る理由が分からん。
志賀　自分で言うのもなんですけど何やっても上手くいくタイプで。でも何しても自分にフィットしないっていうか。ここに来て初めてしっくり来るものが見つかった。もうここしか生きる場所が。ここが無くなったらどうなるか分からない。そんな恐怖すらあって。
砂田　でも、まあ分からんでもないよ。ここはいい所だと思う。

志賀　意外な発言。

砂田　嘘は言わないよ。ぼくはね、生まれた時からこの身体に違和感を感じてて。

志賀　違和感。

砂田　だから医者の勉強もした。心と身体が分離してる。普通はラップみたいにぴたっとくっついてるんだけど、ぼくの場合はそれが微妙に浮いてるような感じ。表面張力みたいな感じでギリギリ張り付いてる。ちょっとした衝撃で完全に離れてしまうかもしれない。なんでこの手が動いてるんだろう。足が動いてるんだろうって。この身体という檻に閉じ込められてる錯覚がして気が狂いそうになる。だからたまに意識して動かしてみる。右手の親指から順番にひとつづつ。右手が終わったら左手、右足、左足。

静かに聞いている志賀。

砂田　でも、この村では自分が大きな何かに取り込まれた気がして、少し解放された気がする。

志賀　難しいこと考えてるんですね。

砂田　時間は腐る程あったんで。

志賀　ここは砂田さんに合ってたようですね。

砂田　機械のように生きていければ。ずっとそうしてたんだけど、そこには居られなくなった。ぼくは殺されて家も追い出された。

志賀　殺されたって。幽霊なの砂田さんて。

砂田　まあある意味。

志賀　へえ。それでこの書庫の座敷童子に。

砂田　新聞読めるのここだけだし。というか座敷童子は。それよりあの瑞穂って奴、なんだよ。あいつの双子か何かか。

志賀　何がですか。

砂田　なんか一方的に色々話し掛けてくるんだよ。最近疲れたとか、死にたいとか。終いにゃ泣き始めるわ。

志賀　気に入られたんですかね。それでどうしたんですか。

砂田　どうもしないよ。

志賀　あの子にはあまり近付かない方がいいかも。

砂田　だから向こうから来るんだって。

志賀　ファザコンです多分。甘えられる人探してるんですよ。普段頼られるタイプだし。変に関わるとどんどん甘えてきますよ。

砂田　（溜息）

志賀　でもあれですね。意外と優しい所もあるんですね。

砂田　何が。

志賀　いやなんかあのサボテン育ててるって聞きまして。

砂田　別にいいだろ。

志賀　部屋に持ち帰ってもいいですよ。

砂田　いいよ面倒だし。

志賀　昆虫とか植物が好きなんですね。ここ田舎だけあって珍しい蝶とかいますよね。

砂田　初日に追いかけてったのもそれじゃないですか。

砂田　ああ、うん。珍しいのが。

志賀　自然に囲まれて。わたしは生まれが都会だったんでこういう生活がずっとしたかった。最初はでかい蛾とか見て引きましたけど。わたしはこの村で果てたいと思ってます。

砂田　そう。

志賀　村長は、あなたのような人の為にこの村を作ったんだと思いますよ。

砂田　一度も会ったことないけど。

志賀　あの人、人見知りだから。

砂田　人見知りの村長ってあり得るのか。

志賀　というか砂田さんて意外と喋るんですね。

　　　少しはっとする砂田。

砂田　飲みすぎた。

ふらふらと歩き始める砂田。

砂田　あんたさ。

志賀　はい。

砂田　俺の正体知ってるんだろ。

志賀　……おやすみなさい。

退室する砂田。

そして砂田のコップを持って奥のドアに消える志賀。

11月2日（金）。12時30分。

伝馬が書庫に入ってくる。

人を探している様子だが、書庫にいないと分かると諦めてお茶を飲み始める。

砂田が入ってくる。

伝馬　あ、すいません。あなた砂田さん。

砂田　ああうん。

伝馬　ここに出入りしてるって聞いてきたんだけど、ようやく会えた。

砂田　（無視）

伝馬　噂では聞いてましたけど、その首の包帯ずっとしてるんですね。

砂田　それ聞いてどうするんですか。それが分かると気持ちいいんですか。

伝馬　多少気持ちいいかな。

砂田　そう。

伝馬　答える気ゼロだな。ここ、慣れましたか。

砂田　特に。

伝馬　嫌われてます、自分。

砂田　いや。

伝馬　俺、砂田さん結構興味あるんです。なんでここに来たのか一度じっくり話を聞いてみたく。色々と面白い話が出来そうな気がしてて。ここって脱走する人が

多いそうで。砂田さんも脱走すると思ったけど意外と定着して。

面倒になって外に出ようとする砂田。

伝馬　そうそう、ここの裏しばらく歩いた奥に大きな木あるの知ってます。脱走したいけど行く場所が何処にも無い人があそこでたまに首を吊ってるらしいです。

伝馬を睨み付ける砂田。

砂田　なんでそんな話を。
伝馬　あなた、妙音大幸さん、ですよね。
砂田　ミョウオン。
伝馬　ですよね。
砂田　誰かと勘違いしてるんじゃ。
伝馬　確か15年位前にある研修医が入院患者の点滴に毒を入れて殺したって事件。その犯人の名前が妙音大幸。確か死刑に。でも規定の時間吊るされて死ななかった場合、もしくは後で蘇生した場合は死刑執行済みってなるんですよね。その後釈放されて消息不明。まさかこんな所で。
砂田　追ってきたのか。
伝馬　いえいえ。別の用事で来たんですけど、まさかね。
砂田　で、どうすんだ。
伝馬　とりあえずどうもしませんけど、砂田さんこそなにしに。
砂田　別に。
伝馬　いや、一旦気になるとこだわってしまう質で。また話聞かせてください。

無言で出て行く砂田。
それを追って出ていく伝馬。

11月6日（火）。19時。

慌てたように入室する志賀と茶屋。
少し狼狽している志賀。

志賀　だからなんで栄さんが。
茶屋　だったら見て来てよ自分で。

志賀、しばらく躊躇するが突然外に走り出す。
放心状態で椅子に座る茶屋。
瑞穂の格好をした栄が入室する。

栄（瑞穂）　茶屋さん。
茶屋　あ。瑞穂ちゃん大丈夫。もしかして栄さんのあれ。
栄（瑞穂）　（何も言わない）

志賀が戻ってくる。

茶屋　いましたか。
志賀　なんで栄さんが。あれ瑞穂、さん。
栄（瑞穂）　志賀さん。
志賀　……分かってる。今確認した。

静かに泣き始める栄。
それを見守るしかない志賀と茶屋。

志賀　なんで栄さんが。
茶屋　分かる訳ないでしょ。
志賀　とにかく降ろしてあげないと。
茶屋　そうね。
志賀　茶屋さんは瑞穂さんを。誰か呼んで降ろしてくる。

志賀が出ていく直前、伝馬が書庫に飛び込んでくる。

伝馬　ああ皆さん、あっちで。
志賀　もしかして見ちゃいましたか。
伝馬　はい。栄さんが首を。

栄の姿に気付き少し気まずくする伝馬。

志賀　ちょっと手伝ってください。
伝馬　なにを。
志賀　降ろしてあげないと。他にも男性を何人か呼んで。砂田さんは。
伝馬　あの人は来ないでしょ。
志賀　無理にでも呼びます。人手がいるので。
伝馬　いやでもその前に警察を。
志賀　その辺は大丈夫ですから。
伝馬　いやいやいやまずいでしょ。
志賀　とにかく行きましょう。

志賀の剣幕に押されて渋々付いていく伝馬。

茶屋　大丈夫。
栄（瑞穂）（縦に首を振る）
茶屋　いくら嫌ってたからってこれはきついね。

茶屋を見つめる栄。

茶屋　どうしたの。
栄（瑞穂）　いえ。

茶屋の胸に顔を埋める栄。

茶屋　今日は一緒にいようか。

栄（瑞穂）　……うん。

茶屋　大丈夫だから。大丈夫だから。

栄（瑞穂）　うん。

茶屋　そろそろ行こうか。ここに居ない方がいいかも。

栄（瑞穂）　うん。

茶屋　今日はずっと一緒に居てあげるから。

栄（瑞穂）　うん。

茶屋に抱えられて書庫を出て行く二人。

しばらくして口論しながら入室する志賀と伝馬。

伝馬　だからおかしいでしょそれは。

志賀　もう何度も言ってる通り、

伝馬　その何度もの中身がおかしいって言ってるんです。

志賀　何がどうおかしいんですか。

伝馬　このまま栄さんを埋めるっておかしいと思いませんか。その前にやることあるでしょ。

志賀　ここでは普通のことです。

伝馬　普通は家族に連絡したりするもんでしょ。

志賀　伝馬さんが言う普通は世間一般の普通でしょ。ここの普通は。ここに来る人は他人と絶縁して来てるんです。分かってますよねそれは。

伝馬　でも栄さんはお姉さんを探しにここに来てただけで。志賀さんも知ってるでしょ。

志賀　なら尚更。瑞穂さんは外部との接触を最も嫌がってるんです。

伝馬　そういうことじゃないでしょう。

志賀　ここではあなたのような人間の方が異端だってことをちゃんと理解してくださ
い。あなたが少数派なんです。世の中にはそっとして欲しい人間だって。

伝馬　でも、

志賀　でもじゃない！

剣幕に少し引く伝馬。

伝馬　分かりましたよ。そこまで言うなら従いますよ。ただし、ここ出ますからもう。
おかしいよ。

志賀　ご自由に。最初に入れて頂いたお金は返しませんが。

伝馬　いいですよ。まだありますから。

志賀　いや、財産は全て入れる約束でしょ。

伝馬　そんなことしたら出たい時に出られないでしょ。というかそれがそっちの常套
手段なんでしょうけど。

志賀　それは違います。財産を入れるのはここで暮らすという決意表明。こんな人間
がなんで。

伝馬　まあそれはなんとでも。それよりも栄さんのことだって。

志賀　どういう意味ですか。

伝馬　もしかしてこの村の誰かが殺したんじゃないですか。というかあなたとか。砂
田さん。いや瑞穂さんかも。

志賀　伝馬さん。言っていいことと悪いことがありますよそれは。

伝馬　どっちにしたってこのことを書かせて貰いますから。

志賀　書く。

伝馬　わたしね、作家なんです。ネタ探してましてね。ノンフィクション作品ならな
んとか。ここに入れた２００万は取材費と思って。

絶句する志賀。

伝馬　人間ってのは我儘で、ただのフィクションじゃ今の読者は満足しない。痛みを感じさせなければいけない。自分以外の。最近ようやくそのことに気付きましてね。誰かが不幸にならないと喜ばない。

志賀　それでこの村を取り上げようと。

伝馬　ここの話を読んで読者が優越感を得れば。

志賀　でも。でも、次のバスが来るまでに5日。土地勘無い人だと町まで数日掛かるし、バス停までは暗い森の中を歩かないと。まあ無理ですよ。

伝馬　分かってますよ。次のバスで帰ります。それ、俺の身に何か起こるってことですかね。

志賀　そんなことは言ってませんよ。

伝馬　ならいいですけど。確か5日後はこの村の15周年ですよね。それ見届けてから出ることにします。

志賀　特に何もないですが。

伝馬　でも記念日になると普段出ないご飯が出ると。

志賀　そのくらいですね。わたしが作ります。

伝馬　じゃあ楽しみにしてます。最近碌な物食べてませんし。栄さんの所行ってください。ちょっと目眩が。

出ていこうとする志賀。

伝馬　残り5日で他に何か出てくるかもしれませんしね。

志賀退室。
その直前に茶屋が入って来てすれ違う。

伝馬　あれ。瑞穂さんは。

茶屋　ハンカチ落としたっていうから。

伝馬　早く行って。

茶屋　分かってますよ。

茶屋は出ていこうとするがドアの前で立ち止まる。

茶屋　伝馬さんて作家さんなんですか。

伝馬　盗み聞きですか。

茶屋　聞こえただけ。いま志賀さんとやり合って。

伝馬　（答えない）

茶屋　最近志賀さんちょっとおかしくて。

伝馬　最近の志賀さんしか知らないから。

茶屋　そうでしょうけど、とにかくおかしいんですって。

伝馬　まあそうでしょうね。

茶屋　あまり追い詰めないで。本当やばいから。倒れちゃうかも。色々あるからあの人も。

伝馬　約束は出来ないけどね。

茶屋　やっぱり書くんだ。

伝馬　書くよ。

茶屋　もうどうしようもないか。

伝馬　君らには迷惑は掛けないよ、って訳にもいかないか。

茶屋　じゃあ止めないけど、

伝馬　なに。

茶屋　わたしも連れてって。

伝馬　どういうこと。

茶屋　そろそろここも終わりかなって。

伝馬　薄情だな。

茶屋　志賀さんの愛人みたいな所で良い立ち位置を確保してたけどどうも飽きちゃったみたい、志賀さん。潮時。この村もあちこち破綻しまくり。村長もいないし。

伝馬　村長いないの。そういや全然見ないけど。

茶屋　出てっちゃった。世界の終わりを伝えに世界中を回るって。よく分からんけど。村のお金持って。その前にこの村をなんとかしろって。

茶屋　溜息を吐く茶屋。

茶屋　最初は水商売で色々疲れちゃってここに来たの。触りたくもないおっさんらの処理を毎日毎日してたら段々自分の存在理由が分からんく。楽しく生きてく為にお金が欲しかったのに、やってることは全然楽しくない。本当はお金貯めて留学したかったけど。結局人との交わりは多過ぎても少な過ぎても駄目。

伝馬　他にも色々教えてくれるなら連れてってあげても。

茶屋　知ってる範囲なら。ただわたしが悪いようには書かないでよね。

伝馬　善処する。

茶屋　そこは約束して貰わないと。

伝馬　約束、しましょう。

茶屋　交渉成立で。裏切らないでよ。

伝馬　お互い様だけど。いくつか聞きたいこともある。

茶屋　いいけど、とにかくすぐ村出た方が。

伝馬　まだ駄目。それに町まで無理でしょ。

茶屋　そんなこと言ってる場合じゃないから。どうなるか分からないって。

伝馬　ここから志賀さん、追い詰められた人間がどうするか。

茶屋　下手したら殺されるかも。あの人なら。

伝馬　中途半端な記事書くくらいならわざわざ来ない。

茶屋　面倒な性格ね。

伝馬　（苦笑い）

茶屋　じゃあ寝る場所だけでも変えたら。寝込み襲われたら。

伝馬　でもどこかあるかな。

茶屋　探してみるけど、とりあえず一旦わたしの部屋に。

伝馬　じゃあ栄さんの所行ってから。

茶屋　志賀さんの所。わざわざこっちから行かなくても。

伝馬　近くにいる方がむしろ安全だと。栄さんあのままだと可哀想だし。茶屋さんは瑞穂さんの。

茶屋　ああそうだ。待ってる。

茶屋、先に退室。

伝馬、それを見送ってからふらふらと水場へ退室。

１１月１０日（土）。２２時。

志賀が水場からお茶を持って入室。

少しして伝馬が廊下側から入室。

志賀　よく来てくれましたね。正直来ないかと。

伝馬　どうしようかかなり迷いましたけどね。

志賀　伝馬さん。

伝馬　こんな夜中になんですか。

志賀　伝馬さん。

伝馬　なんですか。

志賀　伝馬さんね、下衆の勘ぐりはやめましょうよ。

伝馬　だからなんですか。

志賀　しつこく嗅ぎ回ってるみたいですね。何も出ませんから。

伝馬　そうですかね。

志賀　出ません。

伝馬　まあ確かに違法植物の栽培でもしてると思ってたんですよ、最初は。どう考えてもオーガニックだけでこの村が存続出来るはず。

志賀　出来てますから。

伝馬　まあこの際だから話しましょうか。志賀さん。

志賀　なんでしょう。

伝馬　地下銀行やってるでしょ。それも結構大掛かりに。ある程度資金とコネあれば出来ますからね。志賀さんが過去に何してたか知りませんけど。

答えない志賀。

伝馬　答えないってことはやってるってことで。

志賀　地下銀行ってなんでしょう。

伝馬　そうくるか。不法就労外国人の収入を母国へ送金してあげるお仕事です。お仕事、じゃないか。

志賀　詳しいですね。やってたんですかあなたが。

伝馬　こう見えてカタギの人間なんで。で、わざわざ呼び出したのは。

志賀　村を混乱させるような真似は控えて頂きたい。

伝馬　そんなことしてませんよ。明日には出て行きますし。

志賀　出ていった後が問題なんでしょうが！

伝馬　そんな大声出さないでくださいよ。

志賀　何も書かないと約束してください。どうかお願いします。お願いします。

土下座をする志賀。

志賀　わたしにはもうここしか。実は昔国会議員の秘書やってまして。あそこはただ自分の為にどうするか考える。足の引っ張り合いしかしない。そんな世界に心底うんざりして。あなただって分かるでしょ。ここが必要な人がいるんです。

伝馬　言ってることは分かるけどだからって法律違反は。

志賀　書くのは止めてください。

伝馬　出来ないと言ったら。

志賀　お金ですか。お金なら。

伝馬　あのね志賀さん、我々の根っこにあるのは承認欲求なんですよ。尊敬されたい。認められたい。

志賀　伝馬さんもそうだと。

伝馬　見返さないといけない人が沢山いるんで。

志賀　なんでもいいんで書くのは止めてください。

伝馬　出来ないと言ったら。

志賀　……どうなっても知りません。

伝馬　脅してるんですかそれ。
志賀　どう受け取って貰っても自由です。
伝馬　そんなことより、瑞穂さんの心配してあげたらどうですか。
志賀　瑞穂さん。
伝馬　この前も書類の数字間違えてあちこち大混乱したじゃ。この村じゃ珍しくないですか。瑞穂さんについてそんなに知らないですけど相当仕事出来る子って話ですし、休ませてあげた方が。絶対栄さんの、
志賀　そんなこと分かってます。本人がやりたいって言うんだからそうするしか。
伝馬　どちらにしたってこの村はもう終わりですよ。村長もだいぶ前に逃げたとか。
志賀　逃げた訳じゃ、
伝馬　他にも同じ考えの方はおられるようですよ志賀さん。裏事情色々教えて頂きました。
志賀　誰から。
伝馬　（無視して）じゃあ行きますから。

伝馬、無理矢理話を終わらせて退室。
志賀、しばらく放心の後、部屋を荒らして周る。

１１月１１日（日）。１４時。
志賀は椅子に座って天井を見上げている。
しばらく無言の時間が流れる。

栄が部屋に飛び込んでくる。

栄（瑞穂）　志賀さんいた。

後を追うように茶屋が飛び込んでくる。

茶屋　こんな所に。あちこち探して。

栄（瑞穂）　ずっとここに。
志賀　ああ君らか。
茶屋　亀島さんが急に倒れちゃって。
志賀　そう。
茶屋　もうとにかくちょっと来て。

茶屋、志賀の手を引っ張るが動かない。

志賀　茶屋さんは豚汁食べましたか。
茶屋　そんなこと言ってる場合じゃ。
志賀　むしろ大事なことですよ。

咄嗟に手を離す茶屋。
伝馬が入室。

伝馬　ああいた。
茶屋　伝馬さん、確か亀島さんって豚汁飲みましたよね。
伝馬　うん、味見とか言って。
茶屋　やっぱりそれだ。
伝馬　何が。
茶屋　志賀さんが何か入れたかも。
栄（瑞穂）　ええ。
伝馬　そこまでするか。
茶屋　ちょっと瑞穂さん、亀島さんの様子を。
栄（瑞穂）　はい。

部屋を飛び出す栄。

伝馬　志賀さん。本当に志賀さんがやったの。

志賀　伝馬さんは豚汁食べなかったんですか。
伝馬　いいから。何か入れたのか。
志賀　農薬。

沈黙。

何事も無かったかのように砂田が入室する。
全員を無視してサボテンを愛で始める。

茶屋　とにかく救急車を。誰か町に出ないと。
志賀　数日掛かりますから。知ってるでしょ。まだ夕方のバスを待つ方が。
茶屋　でもそれじゃあ。
伝馬　茶屋さんいいから。志賀さん全部分かった上でやってるから。まさかそこまで。
志賀　で、茶屋さん。あなたが裏切り者か。
茶屋　別に裏切った訳じゃ。
志賀　豚汁食べて欲しかったんですけど。
伝馬　俺が食べるなつったんですよ。
茶屋　ああそうだ砂田さん確か医者でしょ、ねえ。

砂田の手を揺さぶる茶屋。

砂田　なんだよ。
茶屋　なんだよって亀島さんが倒れちゃって。
砂田　だから何。
茶屋　こんな時に何もしないってなんの為の医者。

栄、入室。

茶屋　瑞穂さん、亀島さんどう。

栄　大丈夫でした。
茶屋　本当。
栄　はい、さっき砂田さんが現れて応急処置してくれたそうで。豚汁も全部捨てたので。
砂田、茶屋の手を振り解く。
砂田　もういいだろ。
茶屋　いや、すいません。
砂田　いいけど。
伝馬　あんたって本当に分からん人だな。
砂田　（無視）
伝馬　それよりも志賀さん。なんでこんなこと。
志賀　なんでって。
伝馬　こんなことしてなんの解決にもならんでしょう。
志賀　結局ここの人は死にたいけど死にきれない人の集まりなんですよ。ここを出た所で皆行く所なんか無いですよ。全てを捨ててここで死を待つだけだったんですから。浅い眠りのような日々をただ過ごしていたんです。どうして放っておいてくれない。
伝馬　人を殺してまで。
志賀　あなたが本を書けば少なくとも誰か死ぬことになるでしょうね。何が違うんですか。
伝馬　他に方法はいくらでもあるでしょう。
志賀　例えば。
伝馬　村を解散するとか。
志賀　なんであなたの本の為に解散しないといけないんですか。あなた一人の為に。
伝馬　死ぬよりはマシでしょう。
志賀　いいえ。死んだ方がマシですね。茶屋さんも分かるでしょ。
茶屋　（答えない）。

ちゃんと見ようとしない茶屋。

志賀　茶屋さん、この男は自分が売れる為だけに。そのことで誰かが傷付いても何も思わない。きちんと向き合おうともしない。あなたはまたそんな所に戻るんですか。この村に来た時を思い出してください。泣いてわたしに言った。死んだ方がマシだって。

茶屋　でも。

志賀　自分が許されないことをしたのは分かってる。これからはあなたがこの村を纏めてください。あなたはこの村に必要な人なんです。

茶屋、しばらく考えた後、どちらとも取れない位置に移動する。

志賀　あなたもいい加減本を書くのは。

伝馬　聞くと思いますか。

志賀　だったらもっと大変なことになるでしょうね。茶屋さん。もう一度亀島さんの様子見てきてください。念の為。

無言で退室しようとする茶屋。

伝馬　茶屋さん。これが最後のチャンスですよ。ここで一生過ごす気ですか。

志賀　ここを出たら二度と戻れませんよ茶屋さん。

茶屋、しばらく悩んだ後、無言で退室する。

溜息を吐く伝馬。

しばらく沈黙が続く。

伝馬　志賀さん。

志賀　なんですか。茶屋さんの話はもう終わりでいいでしょう。

伝馬　砂田さん。妙音大幸のことは。
志賀　ああ、知ってたんですか。
伝馬　茶屋さんに全部聞きました。安楽死までやってるって。
志賀　ちょうど以前の担当者が動けなくなってしまったんで。
伝馬　罪悪感とか無いんですか。
砂田　だから同意の上でやってるだけだから。
志賀　あなたにはあなたの言い分があるんでしょう。でもここじゃ通じない。元の世界に戻って、そちらのルールで生きていけば。
伝馬　ここにはまともな人間は居ないのか。
志賀　まるで自分がまとものような言い方ですね。
伝馬　当たり前だろ。
志賀　そもそもあなたが言うまともって何ですか。別に我々は自分達の考えが全てとは思ってない。あなたはわざわざそんな所に乗り込んできて違う違うと喚いてる。
伝馬　世の中色々な考えがあるから人を殺してもいいなんて思わない。
志賀　我々を放っておいて欲しいと言ってるだけです。
伝馬　だからそれが。やっぱり本は書かせて貰います。別に俺だって金儲けだけ考えている訳じゃない。
志賀　そんなこと言って無事に出られると思いますか。
伝馬　結局それか。
志賀　誰も望まないのにのこのこ来るから。
伝馬　砂田、いや妙音大幸がやるのか。

砂田を見る一同。

砂田　いやいやぼくは何もしないよ。死を望んでいる人を殺してるだけで快楽殺人と違うから。それともあんた死にたいの。
伝馬　そんな訳ないだろ。
砂田　なら何もしない。志賀さんも勘違いすんなよ。安楽死とこれは違う。生きたい

志賀　奴なら助けるし、死にたい奴なら殺す。
伝馬　分かってます。あなたには頼りません。
志賀　こんな状況でこれからどうするんだよこの村は。志賀さんがいないとどうにもならんだろ。
伝馬　村長が帰るまでは茶屋さんにお任せします。
志賀　なんでそこまで。
栄（瑞穂）　どうせ一度は死んだ身ですから。ここはそういう集まりなんです。わたしも砂田さんも茶屋さんも瑞穂さんも皆一度死んでるんです。死んでここに辿り着いたんです。私達は多くを望まない。大きな喜びも悲しみもいらない。未来に期待もしていない。子孫を残そうとも思わない。
だから瑞穂にあんなことを言ったんですか。

突然の発言に戸惑う一同。

伝馬　おう。なんだ急に。
栄（瑞穂）　瑞穂の妊娠知ってましたよね。

はっとした表情をする志賀。

栄（瑞穂）　堕ろせなんて。あれからずっと瑞穂は悩んでて。産むことも出来ない。堕ろすことも出来ない。
志賀　いや、
栄（瑞穂）　何がいや、ですか。わたしはここでずっと瑞穂を探してました。でも見つけられなくて。結局瑞穂から声を掛けて貰ったんです。色々な話をしました。家のこと、ここのこと、お互いのこと。妊娠のこと。でも瑞穂はそんなこともうどうでも良くて。ただ死ぬ前に誰かと喋りたかっただけなんです。瑞穂の部屋を出て、嫌な予感がして、戻る途中に。
伝馬　ちょっと待て。何の話だよ。瑞穂はあんただろ。
砂田　この人は栄さんだよ。鈍いな。

伝馬　いや栄さんは首を吊って。

砂田　吊ったのは瑞穂さん。

伝馬　意味がちょっと。

砂田　だから、死んだのは瑞穂さんで、栄さんが瑞穂さんになってた。

伝馬　なんで。

砂田　知らんよ。本人に聞いて。

伝馬　というかなんで断言出来るんだよ。

砂田　栄さんは手首に傷があってね。

伝馬　本当ですか。

手首の傷を見せる栄。

伝馬　えっとじゃあ、志賀さんが瑞穂さんを妊娠させて、そのせいで死んだと。

栄　そうです。村の為とか言いつつ、裏では色んな女性に手を出して。それにわたしが栄だって分かってて放置してましたよね。

志賀　……。

栄　全部志賀さんの自己満足じゃないですか。ここだって結局皆の理想郷じゃなくて志賀さんの理想郷なんです。村長だってそれが分かったから離れたんじゃないですか。

志賀　わたしのやったことは誰の為にもなっていなかったと。

栄　そうかもしれませんね。

志賀　やっぱりあなたは瑞穂さんの妹ですよ。先日全く同じこと言われました。そうですか。自己満足でしたか全て。そんな簡単な一言で。犯罪行為に手を染めてまでこの村の為に尽くしてきたんですけどね。どれだけ皆の為に努力してきたか。

栄　だからそれが自己満足だって言ってるんですよ。

志賀　全部自己満足ですか。

栄　全員あなたの自己満足に付き合っていただけ。その自己満足が瑞穂を殺し、自分の子供も殺したんです。

志賀、脱力し、椅子に座る。

志賀　結局ここも同じか。面倒なことは人に押し付けて、うまくいかないと全部。で、どうします。

伝馬　あんたはどうすんだ。

志賀　どうしましょうね。あなたと一緒にここを出ますか。なんなら執筆協力しますよ。

伝馬　えらい変わりようだな。

志賀　張り詰めていた物が切れてしまったようで。どちらにしたってここにはもう居られないことは分かってますから。

伝馬　ここはどうなる。

志賀　茶屋さんにお任せしますよ。その為にずっと横に置いてたんですから。村長が戻るまでの間くらいならなんとか。

伝馬　村長戻るのか。

志賀　戻ります。断言出来ます。そういう人ですあの人は。とりあえず出る準備してきても。

しばらく考え、頷く伝馬。

それを見て退室する志賀。

伝馬　で、栄さんは。

栄　どうしよう。

伝馬　バスが来るまでもう少しだけ時間があるから、それまでに。

栄　はい。

伝馬　でもさ、なんで瑞穂さんになり変わろうって。

栄　言わないと駄目ですか。

伝馬　ああいや、記者の癖みたいなもので。

栄　結局瑞穂になりたかったんですわたしは。わたしはあの子の才能が羨ましかっ

た。わたしの欲しい物を全部持っていた。でも駄目。結局持っていない人間が持っている人間になるなんて。すぐボロが出ちゃって。志賀さんはすぐ気付いたみたいで。美大出たって才能無いなら。瑞穂の方がよっぽど芸術家でした。

伝馬　双子でも色々違うもんなんですね。

栄　そうやって比べられるんですよいつも。

伝馬　ああすいません。そろそろ準備があるんで。俺も。

伝馬、退室。

栄と砂田だけになり、いたたまれない空気となる。

栄　じゃあわたしもそろそろ。

砂田　あ、ちょっと。

栄　ああはい。

砂田　このまま嘘付いたままでいいのかなあんた。

栄　急になんですか。

砂田　別に誰かに言ったりはしないけどね、いいのかなと思って。

栄　なんなんですかいきなりそんな。大丈夫です。

砂田　あんた妊娠出来ない身体だろ。

栄　なに突然。

砂田　こう見えて元医者なんで。さっきの話でようやく合点がいった。どんなちっぽけなものだったとしても、自分に無いものを持ってる人は羨ましいだろうね。それが双子だったら尚更。

栄　そんなのあなたの想像でしょ。

砂田　自殺であんな傷は付かないんだけどね。まあどっちだっていいよ。あなたが良ければ。生きたければ生きればいいし、死にたければ死ねばいい。

栄　じゃああなたはなんで生きてるんですか。

砂田　それが分かればとっくに死んでる。

砂田、退室。

一人残される栄。

外から叫ぶ茶屋の声が聞こえてくる。

茶屋　村長、村長帰ってきた。

幕